

日本高齢者虐待防止学会

ニュースレター通巻14号



発行責任者:池田直樹(日本高齢者虐待防止学会理事長)
編集責任者:高崎絹子(日本高齢者虐待防止学会理事)

通巻第14号に寄せて	1
第11回日本高齢者虐待防止学会横浜大会	2・3
第10回愛媛大会報告	4
シリーズ高齢者ケアと災害④	5
理事会・委員会だより	6・7
事務局だより	8

学会HPアドレス:<http://japea.jp>

平成26(2014)年2月発行

通巻第14号に寄せて

独創性と共同性

瀧澤 利行（茨城大学教育学部教授 理事）

本稿の骨格を構想している際に、標記の主題に関わって二つの興味あるニュースを見聞した。一つは理化学研究所の若手女性研究者によるいわゆるSTAP細胞の発見であり、いま一つは、とある「作曲家」のいわゆるゴーストライター事件である。いずれもまだホットなニュースであるし、進行形の事象でもあるので、その詳細や事の真偽には言及しない。そして、さらに医療関係でのいくつかのデータねつ造のニュースは昨年来報道にいとまがない。そこで話題となっていることは、高齢者虐待防止研究を含めた看護学、公衆衛生学、あるいは社会科学全般においても極めて密接に関連する要素を含んでいる。ここでは、この2つの事象から研究上の問題について小考したい。

iPS細胞にしてもSTAP細胞にても、あるいはほとんどすべての自然科学においても、研究はある研究者ひとりでは成り立たない。多くの文献の検討、目的に向かう研究デザイン、継続する実験、処理すべき膨大なデータ、執筆、そして日本人の場合には英文のプルーフィングにいたるまで、一つの研究は多くの人々の手を経る。そして、その研究における貢献度によって筆頭の著者や次席の著者が決まり、それぞれの成果に応じてその名誉や時に報酬を手にする。正当な研究過程を経れば、これについて何らかの異議や異存が生じることは通常ない。ところが、筆者自身も目にしてきたことがないとはいえないあまりにも多くの著者が連なった論文は数多い。それはもちろん正当な研究集団としての合意形成のもとでつくられたものであることがほとんどではあろうが、時にはほとんど本人も知らないままにその集団に帰属しているというだけで自らの名前が記されているようなものもないとはいえない。そのような場合、名前を載せられた本人はその時点では特に不利を被るわけではないので、多くの場合あたかもそれに参加していたかのように自分の名前が記されていることに対して異議申し立てはしない。「私は実はその研究には関わっていません。投稿されたことも知りません」などとは。ところが、その研究が研究過程で大きな誤りがあったりデータがねつ造されていたりしていた場合には、本来その研究の参加者全員に責任が及ぶものである。しかしながら、多くの場合そのような際には「私はその研究には実質はまったく関わっていなかった、データのねつ造についても知らなかつた」などの弁明に終始する。某作曲家のゴーストライター事件においても、事が明るみに出る前には、名だたる指揮者やソリスト、交響楽団がその作品（ほとんど別人の手によると思われるもの）を手離しで絶賛し、聴衆の前で憚ることなく祝意の抱擁をしていた。「まったく知らなかつた」「本人のつくったものだとばかり思っていた」といえば免責されるだろう。しかし、その姿は事が明らかになった後ではどうしても滑稽に見えてしまう。少なくとも研究に心を寄せるものは、自分の研究が正当な意味で多くの人々との共同作業であることを認識しない人はいないだろう。同時に研究者は絶対に人には譲れない独創性と固有の思想をもたなければならぬであろう。それによって自らを律することができる時のみ、図らずも滑稽な場に居合わせてしまう愚を避けることができるのではあるまいか。



第11回日本高齢者虐待防止学会 横浜大会

平成26年7月5日(土)に開催(第2報)

大会テーマ：高齢者虐待と家族支援

日 時：平成26年7月5日(土)

場 所：関東学院大学(7月4日・関内メディアセンター、7月5日・八景キャンパス)

大会長：関東学院大学 教授 副田あけみ

<大会実行委員会・理事会企画：ワークショップのご案内>

時：7月4日(金) 会場 関東学院大学関内メディアセンター

13:40～受付、 14:30～開始

* 「認知症ケアの最前線」(講演とワークショップ) (定員120名)

講師：遠藤英俊(国立長寿医療研究センター内科総合診療部)

* 「高齢者虐待事例への面接技術」(ワークショップ)(定員60名)

講師：長沼葉月(首都大学東京)

< 第11回日本高齢者虐待防止学会横浜大会>

時：7月5日(土) 会場 関東学院大学八景キャンパス

8:40～ 受付 9:30～ 開始

9:30～9:40 日本高齢者虐待防止学会理事長挨拶：池田直樹(大阪アドボカシー法律事務所)

9:40～10:25 大会長講演：「高齢者虐待防止と家族支援」副田あけみ(関東学院大学)

10:30～12:00 特別講演：「『家族の暴力』に向き合う援助職」信田さよ子

(原宿カウンセリングセンター所長)

12:10～13:00 昼食・総会 (学会員は昼食をとりながら総会参加をお願いします)

13:15～15:00 シンポジウム：「高齢者虐待防止における家族支援とは？」

シンポジスト：堀越栄子(日本女子大学)

：松下年子(横浜市立大学)

(国分寺市地域包括支援センター(国分寺市福祉保健部
高齢者相談室))

コーディネーター：副田あけみ

15:15～17:10 自由研究報告(口演)

15:15～17:10 分科会1：「養介護施設内の虐待防止に向けて」

報告者：土屋典子(立正大学)

関口敬子(社会福祉法人えがりて吹上苑)

川村哲穂(富士市福祉キャンパス)

<p>司会 : 雨宮洋子 (総合ケアセンター泰生の里)</p> <p>15:15~17:10 分科会2 「高齢者虐待防止に向けた市町村の取り組み」</p> <p> 報告者: 高見靖雄 (東浦高齢者相談支援センター)</p> <p> 中野佑介 (藤沢市高齢支援課)</p> <p> 土屋幸己 (富士宮市福祉総合相談課)</p> <p> 司会 : 前神有里 (愛媛県中予地方局地域政策課)</p> <p>15:15~17:10 法制度推進委員会</p> <p>15:15~17:10 論文作成相談コーナー</p> <p>15:15~17:10 テーマトーク①:「分離判断と養護者(家族)支援」</p> <p> ファシリテーター: 松本葉子 (田園調布学園大学)</p> <p>テーマトーク②:「事実確認がしづらいケースへの対応」</p> <p> ファシリテーター: 藤井日向(国分寺地域包括支援センターもとまち)</p> <p>17:20~19:00 情報交換会</p>
--

★ワークショップと大会の参加費、および申し込み開始日・締め切り日 :

<7月4日ワークショップ> KGU 関内メディアセンター

http://media.kanto-gakuin.ac.jp/koutsuu.html 〒231-0011横浜市中区太田町2-23

参加申し込み	会員	非会員
定員になり次第終了	1,000円	2,000円

<7月5日大会>八景キャンパス

http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/ 〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

参加申し込み	会員	非会員	学生・院生	シニア	情報交換会	弁当
5月31日まで	5,000円	5,500円	1,000円	1,000円	3,000円	800円
当日参加	5,500円	6,000円	2,000円	2,000円	—	—

★各種申し込みおよび自由研究報告のエントリー方法 :

日本高齢者虐待防止学会のホームページ (<http://www.japea.jp/>) から横浜大会のHPに入るか、横浜大会のサイト (<https://sites.google.com/site/11thpea/>) に直接入り、申し込んでください。

★自由研究報告のエントリー締め切り日(口頭発表15分、質疑応答5分) : 平成26年4月20日

★自由研究報告の抄録原稿提出締め切り日 : 平成26年5月7日

★抄録原稿の提出先 : 関東学院大学副田研究室横浜大会事務局 kantogakuinea@gmail.com

添付ファイルでお送りください。抄録原稿のフォーマットはHPからダウンロードしてください。
自由研究報告は口演のみでポスター発表はありません。

★参加費および情報交換会会費等の振込先 : ゆうちょ銀行 記号10230 番号10228691

**加入者名 : 日本高齢者虐待防止学会横浜大会。(他の金融機関からの振込の場合は、店名○二八
店番028 口座番号1022869)。参加費等の振込を確認した時点で申込み完了とさせていただきます。**

★横浜近辺にはホテルは多数あります。早めにご予約ください。宿泊先の手配はいたしません。

★お問い合わせ先 : kantogakuinea@gmail.com (メールでお問い合わせをお願いします)

**◆八景キャンパスへのアクセス～横浜駅から京急本線快特で19分、3つ目の駅、金沢八景で下車徒歩15分(もし
くは、京浜急行バス:関東学院循環で「関東学院正門」または「関東学院東」下車。**

(注意: 関東学院大学関内メディアセンターの最寄り駅は京浜東北線関内駅です)

***第11回大会についての詳細は、本学会ホームページ(<http://www.japea.jp>)等をご覧下さい。**

第 10 回日本高齢者虐待防止学会愛媛大会の報告

愛媛大会事務局長 陶山 啓子（愛媛大学大学院看護学専攻）

記念すべき第 10 回目の日本高齢者虐待防止学会愛媛大会は、『人権の調和』一人ひとりの幸せを見つめて』をメインテーマに、去る平成 25 年 9 月 21 日に松前総合文化センター（メイン会場）で開催されました。大会長の山本克司先生が人権の調和をテーマに「人権とは何かについて」お話しされたのを皮切りに、シンポジウム I 「垣根を越えよう」では、医療職・福祉職そして法律家がそれぞれの立場から専門性の違いについて話され、午後のシンポジウム II 「地方発 仕組みづくり」では、それぞれの地域の持つ特徴に応じた仕組みづくりの実践活動が報告されましたが、何から始めていけばよいのか考える機会となりました。分科会は「施設虐待」、「多分の連携」そして「認知症高齢者の権利擁護」と多彩な内容を準備しましたが、各会場ほぼ満席の状態で活発な意見交換が行われました。参加者からは、職種を越えた連携の必要性を強く感じた、理論をいかに実践に活用すればよいかがわかつた等の声をいただきました。

学会当日は、さわやかな秋晴れに恵まれ、650 名を超える多くの方々に参加していただきました。当初、四国松山というおそらく、「交通の便が悪い」と感じるところへどれだけの人に来ていただけるか、不安を抱きながら、4 人で始めた学会準備打ち合わせ会ですが、運営委員の人選では県内・近県で高齢者虐待に積極的に取り組んでいる様々な職種の人々の名前が次々と上がってきました。その方々に学会に入会していただき、運営委員会を開催するところまでこぎつけました。また、学会会場は県内で高齢者虐待に積極的に取り組み、先駆的な活動を行っている松前町での開催としました。そして山本大会長のもと、研究者だけでなく、現場で活躍する実践者との連携ということを中心にして企画・運営いたしました。そのことを象徴するのが、当日は多くの民生委員の皆さまがシニア受付で手続きをされたことです。運営委員の呼びかけでこんなに地域の皆様に集まっていただけたのは、まさに実践する運営委員のなせる業だったといえます。本大会は、松前町役場の職員の方々の多大なご協力で実施でき、また、地域の皆様のご協力でぬくもりのある学会となりました。町長様はじめ関係者の皆様に深謝申し上げます。

最後になりましたが、遠路はるばる学会に参加して下さった方々、ご支援下さいました理事・評議員の先生方、その他の関係者の方々に心からお礼申し上げます。

シンポジウムと山本大会長



第10回松山大会に参加して

森 千佐子（佐野短期大学総合キャリア教育学科）

昨年末、厚労省から介護施設の職員による高齢者虐待が過去最多になったという、残念な調査結果が報告されました。私は現在、介護福祉教育に携わっており、利用者的人権を尊重し、「一人ひとりの幸せ」を実現できる介護専門職の養成に取り組んでいます。今回「介護福祉学生の身体拘束体験による拘束に対する認識の変化」のテーマで、共同研究の発表をさせていただきました。介護保険施設等の運営基準に身体拘束禁止が規定されていますが、実際には拘束は行われています。2年生の授業に身体拘束体験を取り入れたところ、学生の問題意識は高まりました。しかし、拘束を容認する意見もあり、介護実習での体験が大きく影響していると考えられました。そこで、早い時期から問題意識を持てるよう、1年生の授業に拘束体験を取り入れ、結果について発表しました。参加者の方々から、ご質問やご助言をいただきました。

本大会では、わかりやすいことばで人権や人権調整について語られた大会長講演をはじめ、シンポジウムや鼎談等に参加し、虐待の現状や課題、多分野・多職種連携のあり方など、様々な視点から虐待防止について改めて考えることができました。大会長の山本克司先生はじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

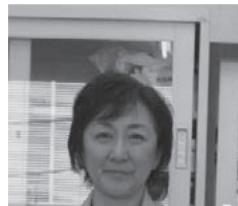
シリーズ「高齢者ケアと災害」④

東日本大震災による福島県双葉町集団避難と埼玉県加須市の3年間の支援(第1回)

—加須市保健師へのインタビューによる活動の経過報告—

話す人：間下 知子（埼玉県加須市健康づくり推進課副参事

兼加須保健センター副所長）



はじめに 平成23(2011)年3月11日に発生した東日本大震災からもうすぐ3年になろうとしているが、本格的な復興への道はまだ遠いと言わざるを得ない。特に福島県において地震と津波、さらに原発の被害の3重の被害を受けた地域の多くはさらに復興が困難な状況にある。福島県双葉町は原発から10キロ圏内に位置し、全町が強制避難区域にあり、人口約7100人の2割を越える人々が、震災発生後役場機能とともに埼玉県のさいたまスーパーアリーナへ集団で避難した。その後、加須市の旧騎西高校校舎へ移動した。埼玉県や加須市の集団避難者への支援は約2年9か月後の平成25(2013)年12月27日に最後の避難者(65歳の男性)が退所するまで続けられた。これは過去に例のない大規模な集団避難であった。現在、双葉町の役場機能はいわき事務所、埼玉支所、郡山支所に分散して置かれている。

＜平成23(2011)年3月～25(2014)年1月の約3年間の経過(概要)＞

平成23年3月11日 東日本大震災発生、その後、上田埼玉県知事が双葉町の集団避難の受け入れを発表。

3月19日 埼玉県さいたまスーパーアリーナへ双葉町から町役場の機能とともに集団避難。

3月30日～31日 さいたまスーパーアリーナから町民約1200人がバスで加須市の旧騎西高校に移動、その後約2年9か月間 旧騎西高校の体育館や1階～5階の教室で集団避難生活

平成25年6月17日 福島県いわき市に役場機能が移転、加須市に埼玉支所設置

平成25年12月27日 加須市旧騎西高校避難所の最後の避難者が退所、避難所の閉鎖、
平成26年1月に加須市を訪問し、健康面からの支援を直接担当した健康づくり推進課加須保健センター副所長の間下知子保健師に支援活動についてお話をうかがったので、以下に報告する。(本学会広報委員長 高崎)

問：さいたまスーパーアリーナから加須市の旧騎西高校への移動は3月30日と31日で、災害が起こった3月11日からわずか20日後でしたが、受け入れ当初から2年目にかけての混乱状態の中での支援活動はたいへんだったと思います。特にご苦労されたことはどのようなことでしたか。

間下：はい、私は3年前の3月末に加須市の支所から本庁へ異動することが決まったばかりの時でしたが、着任前から「加須市双葉町支援対策本部会議」に加わることになり、無我夢中で支援活動に取り組みました。課題はたくさんありましたが、大変だったことの1つは、**感染症の流行への対策です**。保健所と一緒に、まず取りかかったことは、保健室を避難所の旧騎西高校内に作り、対応することでした。アリーナにいたところからインフルエンザは流行していましたが、移転後、感染された方が増え、感染を少しでも防ぐため、感染症室を設け、手洗いなどの予防対策をとること、医療機関につなげることが急務でした。市では医療機関にかかるための仮保険証を作成し、保健所、医師会、歯科医師会などと連携を図って、必要な方はすぐに医療機関に受診できるようにしました。冬に大腸性胃腸炎が発生した時は、共同生活をされていますから、汚物の処理をして感染が多く、感染予防のための消毒、衛生教育などが本当に大変でした。

また、移動してきた当初、双葉町の保健師は24時間勤務のような状態なので、近隣市町村の保健師も交代で保健室に勤務し、医師会や埼玉県看護協会などの協力で巡回訪問をしました。

その後の約3年間にわたる支援活動を通して、私はこのような大災害時の支援活動における健康支援や調整等、保健師が担う公衆衛生の役割の重要性を改めて実感しました。

2つ目は、ボランティアへの対応です。毎日多くの善意の方が来て下さり、早々に市のボランティア募集の窓

口は閉じました。しかし、休日の保健室対応のボランティア保健師についてだけ募集窓口を設けていたところ、保健師でない方の遠方からの問い合わせもあり、その対応や調整のため、時間を費やすことが多く、通常業務ができないほどでした。特に、災害時の初期には、ボランティアのためのコーディネートを行う組織・機能が絶対に必要です。

3つ目は、職員やスタッフの健康管理です。大災害発生直後の混乱の中で、原発から 10 キロ圏内の強制避難区域に町全体が入る双葉町の集団避難の決断は、双葉町の町長さん方の苦渋の選択だったと思いますが、受け入れる側の上田埼玉県知事、加須市大橋市長の決断も大英断だったと考えます。これに応えようと 支援活動を行う職員らスタッフは一丸となって頑張っていました。しかし、加須市の担当者や双葉町のスタッフ等は、先が見えない中で休みもほとんど取れない状況もあり、かなり疲労が溜まっていました。自分自身を含めた支援者側の健康を維持するのも大切であることを痛感しました。
(以下続く)

さいたまスーパーアリーナ



避難所閉鎖後の旧騎西高校前の間下氏



加須市役所



加須市保健センター

～理事会・委員会だより～

＜日本高齢者虐待防止学会創立 10 周年記念誌・前理事長多々良紀夫先生追悼集編集委員会＞

創立 10 周年記念誌・追悼集編集委員会委員長
塚田 典子(日本大学)

学会創立 10 周年記念誌・前理事長多々良紀夫先生追悼集を無事発行することができました。関係者の皆様の多大なご支援、ご厚情に深く御礼申し上げます。



愛媛大会会場のようす

昨年の 2013 年 9 月 21 日（土）に、四国では初めての開催となった、第 10 回日本高齢者虐待防止学会愛媛大会（大会長 山本克司先生）が松山で開催され、大勢の方々が参加されました。その大会に先駆けた昨年 8 月下旬、『日本高齢者虐待防止学会創立 10 周年記念誌』、そして 2012 年 4 月に急逝された当学会の『前理事長多々良紀夫先生の追悼集』を合わせて刊行し、会員の皆様にお届けしました。その際、会員の皆様に、『創立 10 周年記念誌・前理事長多々良紀夫先生追悼集出版のため、学会活動の今後の充実・発展のために』という趣旨で、寄付募集を依頼いたしました。愛媛大会会場入り口でも、寄付ブースを設けてさせていただきました。なお、このブースでは、淑徳大学大学院多々良研究室の元ゼミ生がボランティアで終日出張って下さいました。

お蔭様で、会員の多くの皆様から多額のご寄付をいただき、当初の寄付目標額（80 万円）をはるかに上回る 1,037,722 円（2014 年 1 月 21 日時点）が集まりました！次回以降のニュースレターおよび学会 HP で、順次寄付者ご芳名を紹介させていただきますが、編集委員会一同、皆様のご厚情に心より深く御礼申し上げます。

さて、編集委員会が一丸となって作成した創立 10 周年記念誌の出来はいかがでしたか？創立 10 周年記念誌へいただいたご祝辞や寄稿原稿、新聞記事等を読んでおりますと、当学会の設立は、先達の先生方が、2003 年の設立に至る随分前から、高齢者虐待防止に強く関心を寄せ、危機感を感じ、虐待問題を解決・防止しよう！と虐待

に関する諸研究調査、虐待防止マニュアル作成、相談のサポートライン等の様々な草の根活動を蓄積された賜物であることがお分かりいただけだと思います。そういう私自身も、実はこのことを編集過程から学んだ一人なのです。先達の諸先生方が身銭を切って虐待防止に向けて活動を続けられた熱意と汗、そこに込められた願いと期待、それらを一つに結集して誕生した感動の日本高齢者虐待防止学会設立と高齢者虐待防止法の成立でした。

次の20周年記念へ向けてバトンを受け継ぐ全会員による、創立20周年記念に向けての第一歩はすでに始まりました。これから10年間、会員一人ひとりが自身の持ち場で虐待に対する問題意識をもち続け、解決に向けてまい進すること、そして各領域で積み重ねられた知識と知恵、実践と経験知とが結集されなければなりません。日本高齢者虐待防止学会が更なる飛躍のバネ（土台）となるよう、皆さんと力を合わせてがんばっていけたらと願いつつ、本編集報告を終わりたいと思います。

本事業へのご寄付は平成25年12月末日で締め切らせていただきましたので、以下にご寄付をいただいた方々のご芳名を掲載させていただきます。なお、本芳名者リストに名前の掲載をご辞退された29名ありましたことを申し添えます。皆様のご厚情に再度心から御礼申し上げます。

<寄付者ご芳名リスト>

(五十音順)

【会員】

雨宮 洋子	新井 康友	安藤 智子	池田 直樹	岩沢 純子	岩田 克夫
臼井 キミカ	内池 正記	梅崎 薫	江野尻 正明	遠藤 英俊	大下 直樹
大和田 猛	奥田 垂由子	尾崎 美恵子	小澤 吉徳	小野 ミツ	小幡 秀夫
勝亦 麻子	賀戸 麻里子	河出 三枝子	神崎 由紀	岸 恵美子	木原 道雄
久代 和加子	後藤 由美子	酒井 陽子	坂田 伸子	坂本 勉	櫻井 美代子
佐々木 明子	佐々木 隆夫	柴尾 慶次	白井 みどり	副田 あけみ	高崎 絹子
高橋 努	滝沢 香	田中 勇	田部 宏行	塚田 典子	堤 千鶴子
角田 幸代	津村 智恵子	土井 郁代	外口 玉子	中尾 治子	中川 恵子
長坂 奎英	二宮 佐和子	萩原 清子	箱石 文恵	濱田 和則	原嶋 朝子
福田 弘子	布施 千草	本田 正宏	前神 有里	増尾 由紀子	増田 幹司
松下 年子	箕浦 とき子	六鹿 直視	村山 尚紀	森 保道	矢頭 範之
山口 光治	山田 祐子	山中 康平	横山 奈緒枝	横山 勝	吉岡 幸子
和田 忠志					

【非会員・団体】

増田 公香	野田 健	武子 愛	大澤 直樹	高橋 昌子	岡 恒忠
坪田 章彦	小方 圭子	TsuAnn Kuo	K.T.Tatara	社団法人 日本社会福祉士会	

最後に、創立10周年記念誌・前理事長多々良紀夫先生追悼集の出版にかかった経費の不足に充当した後、残高約15万円のご寄付に関しましては、今後の日本高齢者虐待防止学会の活動の充実・発展のために大切に活用させていただきたいと存じます。今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

<選挙管理委員会>

選挙管理委員会委員長 吉岡 幸子(埼玉県立大学)

昨年12月に、日本高齢者虐待防止学会の平成27年度から平成29年度までを任期とする評議員選挙の告示が行われました。

この選挙結果は、7月4日(金)開催予定の理事会・評議員会を経て、7月5日(土)の日本高齢者学会防止学会総会で報告され、承認を経て、正式に決定されます。

1) 選挙日程

平成25年12月13日(金) 投票用紙等送付

平成26年1月16日(木) 投票締切り

平成26年1月21日(火) 開票

2) 理事・監事選挙日程

平成26年2月24日(月) 投票用紙等送付

平成26年3月15日(土) 投票締切り

～事務局だより～

事務局長 山田祐子（日本大学）

会費の振り込み旧口座が2014年3月で閉設となり、
2014年4月より新口座00130-5-664283のみになります。

2013年4月からの事務センターの新設に伴い、会費納入のための郵便振替口座を新設したことは前回お知らせいたしましたが、いよいよ、今後の会費請求は、新口座への振込依頼のみとなります。本年度は移行期間として旧口座も使えるようにしておりますが、2014年4月より新口座のみとなりますのでご注意ください。口座切り替えにご協力いただきますよう宜しくお願ひいたします。なお、旧郵便振替口座は、2014年3月末で閉鎖いたします。

新口座番号 00130-5-664283

旧口座番号 00910-0-305497

なお、郵便振替口座は、銀行・ATM・ネットバンクからも振り込むことができます。銀行等から振り込む場合は、以下の口座にお振り込みください。

ゆうちょ銀行 ○一九（ゼロイチキュウ）店 当座 0664283

□学会事務センター

*会費納入・住所変更および諸々のお問い合わせ

NPOシルバー総合研究所 日本高齢者虐待防止学会事務センター

〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-9-12 Jビル2階

電話 03-6206-2596 FAX 03-6701-7509

E-mail info-japea@silver-soken.com

□<論文投稿先>

株式会社 効率書房 コミュニケーション事業部 梅澤桃子 宛

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1

TEL 03-3814-7114 FAX 03-3814-6904

E-mail japea@keiso-comm.com

*論文の投稿の際は、封筒に「日本高齢者虐待防止学会 投稿論文在中」と朱書きしてください。

<投稿・問い合わせ先>：横浜市立大学医学研究科・医学部看護学科松下年子研究室

〒236-0004 横浜市金沢区福浦3-9 TEL&FAX 045-787-2541 E-mail toshiko@yokohama-cu.ac.jp

□本部事務局

日本大学文理学部社会福祉学科 山田祐子研究室 日本高齢者虐待防止学会事務局

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 TEL&FAX 03-5317-8987 E-mail ryuno@chs.nihon-u.ac.jp

□学会ホームページアドレス : <http://japea.jp>

～編集後記～

★…年会費納入のお願い…★

会計年度は4月～翌年3月です

正会員年会費 8,000円

賛助会員年会費 20,000円

学生会員年会費 4,000円

創立10周年記念誌等の発刊に当たっては、会員はじめ多くの方々のご芳志により、目標額を上回る寄付が集まりました。関係者一同、心から感謝しております。東日本大震災からもうすぐ3年になりますが、「高齢者ケアと災害」には、同じ県内に住む者として以前から加須市の集団避難支援活動を取材したいと願っていました。2回にわたって掲載する予定です。（広報委員会 高崎絹子）